

《寵猫》

5 黒樫の荒ぶる一夜かまど猫 とちおとめ

静と動の対比が見事。(なのはな)

3 寵猫月に行きたる顔をして ぼんだ

猫が夢をみている？ いや本当に宇宙へ行った猫なんでしょう。(千代志)  
一目でこの猫を好きになってしまいました。(あかり)

《炎》

2 年酒酌みむかし家長の怪気炎 多摩三郎

習い性なのでしょうか・・・様子が見えてきます。(すみれ)

1 押しくらまんじゆう炎えてゆくなりひとりづつ 節子

そうそう小学校の頃に。休憩時間になるともえていました。(潤一)

2 靴底の炎えゆくごとく落葉道 あかり

おもしろく、おそろしい。(節子)

6 マフラーの炎のいろを巻きつけて りりい

作者の決意のようなものを感じます。(ぼんだ)

1 冬ざれの烟を炎ちと走り 英花

人が焚いた火がふと自ずから遊ぶ。火色に透ける冬田が夢うつつ。(葵)

《自由》

4 冬らしくなき冬のなか浮遊せり 山音

寒さの感じない冬の中途半端な気分、共感です。(ようこ)

1 マフラーを縦にたたんで横にまき 英一

2 干菜吊る煙いつとき荒ぶりて みき

冬の日の暮しぶり、亡き母のエプロン姿が目には浮びます。(せきれい)  
焚火の煙が流れて、なつかしい景です。(とちおとめ)